

## アフリカの人間開発：実践と文化人類学

著者	松園 万亀雄, 縄田 浩志, 石田 慎一郎
発行年	2008-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4377">http://hdl.handle.net/10502/4377</a>

2 **みんなく  
実践人類学  
シリーズ**

# アフリカの 人間開発

実践と文化人類学

松園万亀雄

縄田浩志

石田慎一郎

【編著】

明石書店



## 国立民族学博物館「機関研究」の成果刊行について

国立民族学博物館長 松園万亀雄

国立民族学博物館では、文化人類学・民族学の立場から、現代世界が直面する学術上の諸課題に組織を挙げて取り組むため、調査・研究会・国際研究集会などを組み合わせた、大型で公開性の高い「機関研究」を平成一六年度に開始し、これまで、さまざまなプロジェクトを実行してきた。メンバーには本館の教員のほか、全国の大学や研究機関に所属する研究者が参加しており、大学共同利用機関としての機能をより発展させるもので、テーマには、我が国における文化人類学・民族学の研究拠点にふさわしい課題を選んでいる。

「機関研究」は、「社会と文化の多元性」、「人類学的歴史認識」、「文化人類学の社会的活用」、「新しい人類科学の創造」という四つの領域より構成され、各領域内で複数の研究プロジェクトを実施する形態をとっている。第一の領域と第二の領域では、共時的アプローチと通時的アプローチから、現代世界の諸課題に取り組み、第三の領域では、学問的知識を実践の場に生かすべく、開発、国際協力の現場や枠組みにおける文化人類学・民族学の関わり方や有効性が研究されている。さらに第四の領域では、文化人類学・民族学を含む人文・社会科学における新たな研究分野やテーマを開拓するプロジェクトを行っている。

このたび、他の領域に先駆け、第三領域の「文化人類学の社会的活用」の成果を「みんなよく 実践人類学シリーズ」として刊行する運びとなった。各巻では、医療協力、内戦後の社会復興、先住民社会と開発、資源の管理や流通、また最近注目されている巨大災害の復興プログラムなど、多種多様のテーマが扱われる。基礎学問であると同時に、社会的活用までを射程に置いた、現在の文化人類学・民族学の姿を少しでも示せればと考えている。



アフリカの人間開発  
——実践と文化人類学

---

目次

総説——開発をめぐる研究と実践 松園万亀雄

- 1 日本の国際協力と文化人類学 14
- 2 国立民族学博物館と実践人類学 20
- 3 民博共同研究「開発と先住民族」 25
- 4 現場からの課題と提言——論文解題 32

第1章 貧困削減戦略体制下におけるアフリカの地方開発 花谷 厚

- 1 問題意識 44
- 2 アフリカの開発経験と貧困削減戦略 46
  - 2・1 貧困削減戦略（PRS）体制導入の背景 46
  - 2・2 PRSの概要 50
- 3 PRS体制下における開発援助 53
  - 3・1 開発援助手法の検証 53
  - 3・2 プログラム型援助と援助効果の向上 56
- 4 貧困削減と地方分権化 60
  - 4・1 地方分権化政策導入の背景 60
  - 4・2 地方分権化の具体的事例 64

5	地方分権化体制下における地方開発	72
5・1	地方開発アプローチの変遷	72
5・2	新しい地方開発アプローチ	75
6	新しい地方開発アプローチと援助	77
6・1	ドナーによる支援のアプローチ	77
6・2	新しい地方開発アプローチの課題と展望	79
7	おわりに	82

## 第2章 JICAの独立行政法人化と社会的側面配慮への取組み

杉田映理……………89

1	問題意識の所在と本稿の目的	90
2	JICA内の社会的側面への配慮をめぐる取組み	92
2・1	組織的取組みとその沿革	92
2・2	JICA事業の社会的側面への取組みに関わる「人」	99
3	独立行政法人化によるJICAの組織の変化	104
3・1	組織の法的位置づけの変化	105
3・2	改革に向けた三つの視点	107
3・3	組織の再編	109
3・4	JICA事業における人材確保の変化	111
4	考察——社会的側面配慮への取組みに対する独法化の影響	113
4・1	プロジェクトの人材確保・実施方法の変化による影響	113



4・2	国別・課題別体制のもとで	117
4・3	「中期計画」に含まれた環境社会配慮とジェンダー主流化	118
4・4	人間の安全保障——人々を中心に据えた協力を目指して	119
5	今後への展望にむけて	120
<b>第3章 開発援助の世界的動向とユニセフ・プロジェクトの実例</b>		
1	はじめに	128
2	開発援助の世界的動向	129
2・1	世界の動向	129
2・2	日本のODAの特徴	146
3	ユニセフのプログラムの例	147
3・1	モリタニア——砂漠化による人口移動	148
3・2	飲料水確保プロジェクト	150
3・3	トイレ	154
3・4	収入ひねり出し活動 (Income Generating Activity)	157
3・5	マイクロ・クレジット	161
3・6	ギニア虫撲滅	163
4	おわりに	169

箱山富美子

## 第4章 西アフリカにおける水田エコテクノロジーによる緑の革命実現を目指して

——ナイジェリア・ヌベ、ガーナ・アシャンティにおける経験から 若月利之

173

- 1 はじめに 174
- 2 ガーナとナイジェリアのベンチマーク集水域における持続可能な水田開発に関する  
  アクシヨリサーチに関するこれまでの経過 182
- 3 西アフリカの伝統的稲作 188
- 4 緑の革命に関する水田仮説(一) 191
- 5 集約的持続生産性に関する水田仮説(二) 195
  - 5・1 欧米と日本の森林面積の歴史的変遷 195
  - 5・2 低地水田システムの集約的持続性の評価 196
  - 5・3 集水域における地質学的施肥——集水域生態工学あるいは集水域アグロフォレストリー
  - 5・4 人為的に造成された多機能性湿地としての水田システム 201
- 6 西アフリカの内陸小低地における水田開発に関するオンファームトライヤル  
  ——ナイジェリア・ヌベ人農村における事例 202
- 7 JICA研究協力——ガーナ・アシャンティの内陸小低地集水域における谷地水田開発 207
- 8 アジア・アフリカ協力の日本の役割 210

## 第5章 ケニア中央高地ニャンベネ地方における国際開発NGO

——ハビタット・フォー・ヒューマニティによる住宅建設支援とローン返済の現状

石田慎一郎……………221

- 1 はじめに 222
- 2 ケニア中央高地ニャンベネ地方 224
  - 2・1 ニャンベネ地方の住宅事情 226
  - 2・2 ニャンベネ地方の地場産業 228
  - 2・3 ニャンベネ地方における開発援助 230
- 3 ニャンベネ地方におけるハビタット・ケニア 231
  - 3・1 アフィリエート認定の手続き 232
  - 3・2 アゼロガイティ・アフィリエートの概要 233
  - 3・3 アゼロガイティ・アフィリエートの運営形態 235
- 4 アゼロガイティ・アフィリエートにおける住宅建設の手続き 238
- 5 ローン返済の事例分析 243
  - 5・1 ジャネット・ギチエチエ——事例一 243
  - 5・2 マーガレット・カルキ——事例二 245
- 6 ローン返済の遅滞 250
- 7 評価と提言 252

## 第6章 シルク王クウオンゴとの対話——われわれの手で平和をもたらしましょう

縄田浩志……………259

1	「人類学者の興味」と「現地住民の思惑」の「すれ違い」と「すり合わせ」	260
2	シルック王クウォングとの対話	262
2・1	帰郷する民衆と共に白ナイル川をさかのぼる	262
2・2	シルック王国の都ファシヨダで王に謁見する	268
2・3	ファシヨダ再訪	275
2・4	シルック王との対話	280
2・5	泥沼にはまりながら考えたこと	288
2・6	国連の飛行機に救ってもらって生還する	292
2・7	おわりに	300
3	まとめ	301

『アフリカの人間開発』に関連する読書案内 縄田浩志・石田慎一郎 313  
 あとがき 松園万亀雄 349